

【実践報告】

重度失語症者にとっての旅行の意味付けと旅行後の生活への影響

—作業療法における旅行の活用方法についての考察—

田島 明子¹⁾，山本 弘子²⁾，長谷川 幹³⁾

1) 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部

2) 東京都福祉保健局府中療育センター

3) 三軒茶屋リハビリテーションクリニック

E-mail : t-akiko@themis.ocn.ne.jp

The Meaning of Traveling and how Traveling Impacted the Subsequent Lives of Patients with Severe Aphasia: Utilization of Traveling in Occupational Therapy

Akiko Tajima¹⁾，Hiroko Yamamoto²⁾，Miki Hasegawa³⁾

1) Seirei Christopher University, School of Rehabilitation Sciences

2) Tokyo Metropolitan Fuchu Rehabilitation Center

3) Sankenjaya Rehabilitation Clinic

要旨

目的：海外旅行に参加した夫婦にインタビュー調査を行い，重度失語症者にとっての本旅行の意味付けと旅行後の生活への影響を考察することで，作業療法における旅行の活用方法について示唆を得ることである。対象と方法：失語症のある人の中から，配偶者が調査時に同席可能であり，旅行後の生活において事故などの旅行とは無関係なイベントのない4名を対象とし，「発障前の生活」「発症後の生活」「旅行後の生活」「本旅行への関心」「本旅行に対する満足・不満足」「また旅行に行きたいか」について聴取した。結果・考察：本旅行への意味付けと，参加態度，満足度，旅行前後の生活変容の状況を事例毎に整理した。結果より，主体的な旅行参加はその後の生活にも肯定的影響を与える可能性がある，旅行への参加態度は本人の抱く旅行への意味付けの能動性が影響する，旅行に対する満足度の高低と旅行後の生活活性化の有無は関係しない傾向がある，の3点が考察された。

キーワード：失語症，地域生活，意味

Key Words : Aphasia, Community Life, Mean

1. はじめに

1) 研究背景と研究目的

障害のある人の旅行の歴史を辿ると、1970年代初頭に、重度障害のある石坂直行が単独で海外旅行のツアーに申し込み、ヨーロッパ旅行を実現させたが、それは当時例外的なことであり、障害のある人にとって自由に旅行することは困難な状況にあった。現在では移動や施設利用のアクセシビリティに関する法的整備も進み、障害のある人にとって旅行は比較的行い易い作業となっている^{1) 2)}。

NPO 法人失語症友の会連合会の調査によれば、失語症当事者にとって一番行いたい事に旅行が挙がっている³⁾。「旅は最高のリハビリ！」という言葉があるとおり⁴⁾、旅行を経験した失語症当事者やその家族が旅行の良さを感じていることは書籍のなかで語られている⁴⁾。しかしながら失語症当事者にとっての旅行の主観的側面を調査した研究論文数は極めて少ない状況にある。

今回、筆頭筆者は失語症友の会海外旅行団によるドイツ交流会とロマンチック街道の旅行に同行した。始まりはイギリス・スイスの旅行⁴⁾であるが、その後10か所ほど行っている。旅行の形態は、①現地の失語症友の会との交流会、②観光、からなる。ボランティアスタッフとして医師、看護師、言語聴覚士、作業療法士が同行している。つまり、本旅行の特徴として、セルフ・ヘルプ・グループによる活動の一環であり、医療系の資格を有するボランティアが支援を行うというその形態があげられる⁵⁾。

そこで本研究では、本旅行に参加した夫婦にインタビューを行い、発症前後・旅行後の生活状況、本旅行への関心、満足・不満足、また旅行に行きたいか、について調査を行い、重度失

語症者にとっての本旅行の意味付けと旅行後の生活への影響を考察することで、作業療法における旅行の活用方法について示唆を得ることを研究目的とした。

2) 本旅行の概略

本旅行の参加者であるが、重度失語症者が12名（男性9名、女性3名、男性は夫婦での参加、女性は単独での参加）、家族が10名、ボランティアが10名で、総勢32名による旅行であった。

2012年10月27日午前成田国際空港から出発をして、ドイツのフランクフルト国際空港には現地時間の同日午後に着、インターコンチネンタルフランクフルトホテルに宿泊をし、翌日10月28日はそのホテルの大会場にて失語症日独交流会を行った。ドイツ側の参加者は、失語症のある人が10名、家族が5名、支援を行う大学教授が2名、学生ボランティアが3名、言語聴覚士が1名、付添が1名の総勢22名であった。コミュニケーションには通訳ボランティア13名のサポートがあった。

失語症日独交流会であるが、プログラムは主に日本側で検討をおこなった。プログラム内容であるが、合唱を多く取り入れていることは特徴である。まず全員でgood morning to you（ハッピーバースデ이의歌をアレンジ）の曲に合わせ合唱を行い、今回の旅行の日本、ドイツの代表である言語聴覚士がそれぞれの国における失語症のある人のサポートの現状について説明を行った。次に参加者全員が自己紹介を行い、昼食を取りながらの歓談、午後には日本、ドイツから各1名ずつ失語症のある人を代表して、自身についてのプレゼンテーションを行った。そして全員で楽しめるゲームをいくつか行い、最後は皆で肩を組んでビートルズの曲を合

唱し、閉会した。

翌日 10 月 29 日はフランクフルトを後にし、ハイデルベルク城を観光し、ローテンプルクに向かった。ローテンプルクはその晩と翌日 10 月 30 日午前に観光を行い、次の宿泊地であるミュンヘンに向かった。ミュンヘンに向かう道はロマンチック街道と呼ばれる美しい田園風景の広がる道で、途中ディンケルスビュールという古い街並みの残る小さな田舎町で昼食を取り、少し散策を行った。翌日 10 月 31 日は、ドイツの旅行の一番の楽しみであるノイシュバンシュタイン城の見学を行った。ノイシュバンシュタイン城は小高い山の頂きにあるのだが、そこに行くための馬車に障害のある人全員が乗ることができず、車いす利用者以外は歩いて城に向かうことになったが、全員が厳格な入館時刻に間に合い見学を行うことができ、皆で胸を撫で下ろした。11 月 1 日は、キーム湖に浮かぶ島にあるヘレンキームゼー城を見学し、湖を渡る船のなかで美しい夕日を眺めながら帰路についた。翌日 11 月 2 日の午前は自由時間、午後にはミュンヘン国際空港から日本に向かった。

2. 対象と方法

1) 対象

対象は、本旅行に参加した失語症のある人の中から、筆頭筆者の居住地から交通機関を利用し片道 2 時間程度以内の距離に居住しており、配偶者が調査時に同席可能な 5 名のうち、旅行後の生活において事故などの旅行とは無関係なイベントのない 4 名とした。4 名とも聴覚的理解は比較的良好だが、表出は重度ブローカ失語の状態であり、男性であった。

2) 研究方法

(1) 研究デザイン

本研究は、旅行の経験を有する各対象者の人生の文脈を聴取するなかから、旅行経験の意味付けと生活に与える影響を個々の事例の文脈に分節化・構造化して明らかにしつつ、それらの比較検討を通して、旅行経験の生活への影響の一般的傾向を探るという手順を経ており、事例研究法と位置付けられる⁶⁾。

(2) データ収集の方法

インタビュー・ガイドを基に半構成的面接法によりインタビュー調査を行った。インタビュー・ガイドの内容は「発障前の生活」「発症後の生活」「旅行後の生活」「本旅行への関心」「旅行に対する満足度」「また旅行に行きたいか」であった。しかしインタビュー調査は発話した内容を研究データとするため、本研究の対象である重度失語症者のみとの面接では十分な聴取が困難であることが想定されたため、インタビューに際しては妻に必ず同席してもらい、妻が夫の意思を代弁している語りの際には、必ず夫にそれでよいかの確認を行った。また、失語症のある人にとっての旅行への関心を探るうえで、言葉のみでなく行動から予測することも可能であると考えられたため、質問項目に関連して対象者の意思が解釈可能な行動についての逐語録があった場合、それも分析対象に加えた。インタビュー調査は 1 時間 30 分程度行った。インタビュー日時であるが、4 組の夫婦とも 2013 年 2 月から 3 月にかけて実施し、インタビューの実施場所は全て自宅であった。旅行後 3 か月後にインタビュー調査を実施した理由であるが、生活状況が平常化したサイクルを取り戻すために一定の期間を要すると考え、3 か月の期間を置き、インタビュー調査を行った。

(3) データ分析方法

インタビュー内容はICレコーダーで録音し、音声データを逐語録化した。逐語録化した各事例のデータから、基本情報として、インタビュー時年代、脳卒中発障からインタビュー時までの年数、再発の有無、国外旅行経験、屋外移動状況、ADL (Activities of Daily Living: 日常生活活動) 状況を一覧表にまとめた。また発障前後の生活状況、旅行後の生活状況を抜粋し、一覧表にまとめた。さらに、各事例の「本旅行への関心」「本旅行に対する満足・不満足」「また旅行に行きたいか」といった主観的側面について明らかにするために、根拠となる発言、質問項目に関連して対象者の意思が解釈可能な行動についての逐語録を抜粋し、文章化をした。発言を記載する場合には、発言内容をそのまま記述し、「」で表記をした。また対象者の「旅行前後の生活変容」については、妻による対象者の旅行前後の行動観察から新たな生活行為を見出していれば「活性化している」と判断し、逆にこれまで行われていた生活行為が行われなくなったと観察している場合には「不活性化している」と判断した。対象者の生活行為状況についてADLやQOL (Quality of Life: 生活の質) の客観的評価票を使用せず、妻の行動観察から得られた情報を判断根拠とした理由であるが、対象者の生活行為の質・量の変化について不必要な情報聴取の負担を省略し、必要で的確な情報のみを得ることのできる最適な方法であると

判断したためである。

分析結果は、調査対象者を熟知し、本旅行の企画・同行もしている共同研究者らによりスーパーバイズを受け妥当性を確保した。

4) 倫理的配慮

事前に電話により本研究の主旨と倫理的配慮が必要な事項、その方法について説明を行いインタビューの許可を得た。そして、インタビュー実施前にさらに安全面への配慮方法について説明し、同意書に署名をもらった後にインタビュー調査を開始した。なお本調査については聖隷クリストファー大学倫理委員会で承認を得た (認証番号 12078)。

3. 結果

1) 基本情報

結果は表1のとおりである。インタビュー時の年代は、C氏が70代前半であったがそれ以外は60代であった。脳卒中発障からインタビュー時までの年数は全員が10年以上経過しており、D氏については30年が経過していた。国外旅行経験についてはすべての事例が1回以上の経験をしていた。屋外移動状況、ADL状況については、A氏、D氏は杖歩行、ADL自立であったが、B氏、C氏は、車いす介助、ADLは食事のみ自立であった。

表1 基本情報

	A氏	B氏	C氏	D氏
インタビュー時年代	60代半ば	60代後半	70代前半	60代半ば
脳卒中発障からインタビュー時までの年数	18年	11年	10年	30年
再発の有無	無し	無し	有り	有り
国外旅行経験	7回	1回	3回	3回
屋外移動状況	杖歩行	車いす介助	車いす介助	杖歩行
ADL状況	自立	食事のみ自立	食事のみ自立	自立

2) 発症前後、旅行後の生活状況

結果は表2のとおりである。「発障前の生活」「発障後の生活」については、定年が近かったB氏、C氏以外は仕事に打ち込んでいた世代であったが突然の発障により仕事を失っていることが共通している。A氏は、居住していた土地では人と会うことを避け、2年程度は引きこもり同様の生活が続いたが、その後現在の居住地に引っ越しをし、現在は当事者の集まりに参加するなどして日々を過ごしている。D氏は30代での発障であり、半年後に再発をし、重度失語症の状態となった。発障後3年程して元の居住地からは引っ越しをし、引っ越した土地で妻が失語症のある人のための居場所づくりや作業所を始めた。現在では、D氏自身その作業所に通所をし、陶芸や貼り絵などの作業活動を行い、それを生き甲斐としている。B氏、C氏は定年に近い年齢での発障であった。B氏は職場との軋轢がありつつも、定年退職まで通勤を

し、その後は職場であった医療施設にて言語療法を受けてきた。C氏も機能維持的なリハビリテーションを軸にした生活を送ってきた。

「旅行後の生活」については、A氏、D氏については、旅行前と変わらない生活を送っていた。C氏については、旅行後、新聞をよく読むようになり、新聞の広告にある書籍の購入を妻に頼むようにもなった。B氏については、妻曰く「寝ることが増えた」とのことであり、旅行前と比べ、不活発な生活に変化していた。

3) 本旅行への関心

結果は表3のとおりである。A氏、B氏については、本旅行に対する関心はなく、本旅行への参加は妻や療法士の関心に従ったり、促しがあったりし、受動的に参加していたことがわかった。それに対し、C氏、D氏は、本旅行への関心が明確にあり、本旅行へは主体的に参加していたことがわかった。

表2 各事例の発障前後、旅行後の生活状況

	A氏	B氏	C氏	D氏
発障前の生活	鉄道関係の研究所に勤めていた。レールの形態の研究をしていた。	公務員であった。現業をしていたが、後に事務職となった。組合運動に熱心に取り組んでいた。	公務員であった。58歳時に勤奨退職で仕事は辞めていた。その後2年間、民間会社に勤めたが勤務はきつく、それが原因で発障したのではないかと妻は考えていた。	化学系の研究者であった。発障後の一時期陶芸に熱心に取り組んでいたが、「この人の場合はどうしたらこの色が出るんだっていうことが面白かったみたい」と妻は語る。
発障後の生活	◆発障後2年程度は病院以外まったく外出しなかった。知り合いにも会おうとしない生活が続いた。A市から現在居住するB市に越した後、外出をするようになった。復職はしていない。妻は障害を持った自分を職場の人に見られるのが嫌だったのではないかと推測する。妻曰く当時は「にこにこした顔がなかった」。 ◆毎週水曜日に行われる失語症者の集まりに参加したり、月2回行われる失語症友の会の集まりに参加したりして日々を過ごしている。	◆3年後に定年退職を迎える年齢だったが、前年12月に職場から辞表提出を求められた。断固としてそれを拒否し、妻とともに通勤することを条件に、何もすることのない職場に3月まで通勤を続けた。 ◆言語療法については、職場が医療施設であり、もともと知り合いであった言語聴覚士(本旅行の団長)よりリハビリテーションを受けてきた。 ◆発障後、失語症友の会での国内旅行には度々行っていたが、2007年に失語症友の会の旅行で初めての海外旅行であるハワイに行った。しかしその半年後に重症肺炎を患い、旅行は控えていた。	◆介護保険制度のリハビリテーションサービスで言語療法と理学療法は続けているが、現在は作業療法は行っていない。ただ自身で版画作成を行っており、それを作業療法と捉えている。版画の制作は月に2回、近隣の公民館で行っている。最初は腫れ上がってまったく動かなかった右手だが、版画が行えるまでに動くようになった。版画は右手でも左手でも彫れる。右手で書字も行える。 ◆時々「死にたい」と言うことがある。「俺をバカにして」と妻に怒りをぶつけることがあるが、その後は人が変わったように優しくなるため、妻はそれを不思議に思っている。	◆発障後3年半ほど経過したときに、これまで住んでいたC県D市から現在も住んでいるE県F市に引っ越しをした。2回目の発作時に、重度失語の状態となり、言語訓練よりも興味の持てていくことを行っていくとリハビリテーションの目的が方向転換していった。当初、陶芸を熱心に行っており、自宅にお伺いした際に作られた沢山の作品を目にしたが、現在はほとんど取り組んでいない。 ◆妻は1995年に、E県F市で失語症を持つ人の居場所づくりを始め、2002年にはアルゼンチンの失語症者との交流を自主企画し、2004年からは失語症の人が中心となった作業所を始めた。D氏はその作業所に通所し、日々を過ごしている。
旅行後の生活	上記同様、毎週水曜日に行われる失語症者の集まりに参加したり、月2回行われる失語症友の会の集まりに参加したりして日々を過ごしている。	妻曰く「寝ることが増えた」とのことであった。以前にハワイ旅行後に重症肺炎を患った経験があるため、妻はB氏の体調を気にかけている様子があった。	旅行後、新聞をよく読むようになり、新聞の広告にある書籍の購入を妻に頼むことも生じた。妻はC氏の変化から、旅行は人を元気にすると感じていた。	貼絵に熱心に取り組んでいた。笠地蔵という昔話のいくつかのシーンを貼絵で表現しようとしていた。展示会への出典を計画しているとのこと、ピンセットを用いる細かな作業を日中、集中的に行っていた。

表 3 各事例の本旅行への関心

本旅行への関心	
A氏	A氏自身に関心はなかったが、妻がドイツの雰囲気が知りたかったため
B氏	B氏自身に関心はなかったが、B氏の訓練を担当してきた言語聴覚士が旅行団の団長を務めたため誘いを受け、B氏はその言語聴覚士に信頼を寄せており、参加を決めた
C氏	ドイツは第二次世界大戦時の印象が強くて行ってみたいと思ったため
D氏	娘がドイツに留学中であり、娘に会いたいと思ったため

表 4 各事例の本旅行への満足・不満足、また行きたいか

本旅行への満足・不満足、また行きたいか		
A氏	満足・不満足	移動が長かったところがあり「大変だった、しんどかった」と真っ先に語られた。全ての旅程が杖での移動であった。また同じ失語症の仲間との「話ができた」ことに満足を感じていた
	また行きたいか	インタビュー時に移動に負担がない日本を1周する船旅を計画中であった。A氏は旅行が好きではなかったが、発障後は旅行に行きたがるようになり、旅のパンフレットを見つけてはよく持ち帰るようになった。妻は元々旅行が好きで一人で旅行に行ったり、仕事で出張に行くことを好んでいたが、夫が障害を持つようになってからは夫とともに旅行に行くようになった
B氏	満足・不満足	交流会について、B氏は、妻の「自己紹介も楽しかったんだよね」の問いかけに対して、「うん」と回答した。また、「ドイツの方と話しましたか？」の質問に、「それは、ないね」と回答した。観光については、質問者と妻の観光の思い出の話しにB氏は「うん、うん」と頷いていたが、何が良かったか旅の写真を指さすよう促した際には、「いや、俺は…」と躊躇し、「どれもよかった？」という妻の質問に対し、「うん」と回答した
	また行きたいか	B氏はまた旅行に行きたいと思っている。B氏は成田空港を後にしたリムジンバスのなかで「また行きたい」とすぐに言っていたそうである
C氏	満足・不満足	ドイツに行って「よかった」と感じている。一番良かったのは「食べ物」であった。「足をね、みんな歩いて…」と夫が言ったところ、「うらやましかったね」と妻が返事をしていた
	また行きたいか	妻は「あんまり遠出はできない」と考えている。「12時間の飛行機はきつい」と言う。C氏はそれについて「危ないね」と語る。排泄・入浴等、旅行時に不便な経験をしたが夫はそれについて「悪いことは忘れちゃうの」と言う
D氏	満足・不満足	娘に会えたことが旅の一番の収穫だったと言う
	また行きたいか	「行く。失語症、世界ね。失語症、会う」回答した

4) 本旅行への満足・不満足、また行きたいか

結果は表4のとおりである。「本旅行への満足・不満足」については、A氏を除いて、満足であったことが語られていた。A氏は、杖での移動が大変であったことが真先に語られて

いた。はじめにで旅程について紹介したが、ノイシュバンシュタイン城の見学の際には、城のある小高い山の頂きに行くために、30分程度の道のりを車いす利用者以外は歩いて城に向かっており、そうした経験についての感想で

あった。

「また旅行をしたいか」については、すべての事例が「また行きたい」と回答していた。A氏についてはインタビュー調査時にすでに妻との次の旅行の計画がなされていた。B氏については、旅行の帰りのリムジンバスのなかで「また行きたい」と言っていたとのことであった。C氏についても、本旅行時に経験した様々な不便について、「悪いことは忘れちゃうの」と言い、旅行に行くことへの前向きな回答と受け取れた。D氏は、「行く。失語症, 世界ね。失語症, 会う」と回答し、失語症の当事者同士が会うことに旅行の意味を見出していることがわかった。

4. 考察

本研究では、本旅行に参加した夫婦にインタビューを行い、発症前後・旅行後の生活状況、本旅行への関心、満足・不満足、また旅行に行きたいか、について調査を行い、その結果から、失語症当事者にとっての本旅行の意味付けと旅行後の生活への影響を考察することで、作業療法における旅行の活用方法について示唆を得ることが目的であった。

まず、各事例の本旅行への意味付けについて、上記の結果から考察を行う。A氏であるが、表4で記述したように、妻と旅行をするために旅行パンフレットをよく持ち帰るという行動から、「妻と一緒に旅行に行くこと」に意味を見出していることが推測されるため、「妻との共同的活動」と概念化した。B氏は、インタビュー調査結果からは、本旅行の意味付けについての発言や行動は見いだせなかったものの、本旅行参加は信頼する言語聴覚士からの勧めにより自己決定したことから「療法士との信頼関係」と

した。C氏については、第二次世界大戦の記憶からドイツに関心があったとのことから、「社会的関心」と概念化した。D氏については、失語症の当事者同士が会うことに本旅行の意味を見出していたことから、「共同的アイデンティティの育成」⁷⁾と概念化した。

各事例の本旅行への意味付けと、参加態度、満足度、旅行前後の生活変容の状況についてまとめたものが表5である。参加態度については、受動的か主体的かで記載をし、満足度については、満足であれば○、不満足であれば×と表記をした。旅行前後の生活変容については、妻による対象者の旅行前後の行動観察から生活行為状況に変化がなければ○、新たな生活行為を見出していれば「活性化している」と判断し◎、逆にこれまで行われていた生活行為が行われなくなったと観察している場合には「不活性化している」と判断し▼と表記をした。

表5より次の3点が考察された。1点目は、主体的な旅行参加は、その後の生活にも肯定的影響を与える可能性を有する、2点目は、旅行への参加態度は、本人の抱く旅行への意味付けの能動性が影響する、3点目が、旅行に対する満足度の高低と、旅行後の生活活性化の有無は関係しない傾向がある、である。

この結果から、旅行への能動的な意味付けがなされている人は、旅行への主体的な参加がなされ、その後の生活においても、生活行為の連続性を保つかあるいは生活行為の拡大を導いていたことが指摘できると考えた。

長谷川⁸⁾には、生活の質を向上させるために「主体性」が必須であり、「主体性」こそが地域生活のキーワードになるとある。そして、地域生活をサポートするリハビリテーションは、「主体性」を引き出す対応を淡々と続ける必要があるとする。本研究では「主体性」のた

表 5 各事例の旅行の意味と参加態度、旅行後の生活活性化の関連

	旅行の意味	参加態度	満足度	旅行後の生活変容
A氏	妻との共同的活動	主体的	×	○
B氏	療法士との信頼関係	受動的	○	▼
C氏	社会的関心	主体的	○	◎
D氏	共同的身份アイデンティティの育成	主体的	○	○

旅行後の生活変容の記号表記の意味: ◎活性化、○変化なし、▼不活性化

めに、作業に対する能動的な意味付けが必要であることが示された。神保^{10) 11)}は、障害のある人の作業の意味生成には一定の様式が見られ、「作業がもたらす影響」「内外状況との対話」「方略性」「根本的価値観」の4点があるとする。「作業がもたらす影響」とは、作業を行うことで意味を見出す、「内外状況との対話」は、障害を持った後の変化に向き合う、「方略性」は、自己の価値観や生活を守ろうとする、「根本的価値観」は、利他性や正義感などの根本的価値観の存在、である。神保^{9) 10)}の提示する意味生成の様式の存在は、C氏の旅行後の生活活性化を説明し得るものではないか。つまり、個人と環境の相互作用で作業活動は様々に形成され得るが、作業の意味生成には様式、つまり普遍的次元があるからこそ、旅行に対する能動的な意味付けが旅行後の生活行為の拡大形成（新聞や書籍を読もうとする）に関与するというのである。

また、「作業がもたらす影響」を考えると、身体こそが意味生成の源泉であることを指摘する著書もあり¹¹⁾、行為経験こそが意味生成の契機であると言える。今回、旅行に対して能動的な意味付けがなされづらかったB氏についても、行為経験の機会を提供することが旅行に対する意味生成の偶発的可能性を高めることになると考える。

さらに、本研究の対象とした旅行は、当事者交流、観光で成り立つピア・サポート・グループによる活動の一環であるため、単なる旅行と

異なり、神保の提示する意味生成の様式に照らすと、「作業がもたらす影響」だけでなく、「内外状況との対話」「方略性」「根本的価値観」といった側面からの意味生成の契機も誘発されやすいと考えた。

以上より、旅行の活用方法については、対象者の生活の活性化、生活の質の向上に繋げるために、旅行形態の工夫をし、対象者の旅行に対する意味生成を支援し、主体的な参加を促進していくことが重要であることが示唆された。

5. 本研究の限界

本研究結果を一般化するうえでの限界として、調査対象者数と本旅行形態の特殊性があげられる。今後は調査対象数を増やし、様々な旅行形態において調査を行う必要がある。また、本研究は重度失語症者を調査対象としていたため、対象者からの語りが得られづらかったことも挙げられる。このことは、重度失語症者など、言語による意味表出が困難な人が質的研究の対象になりづらい現状¹²⁾にもなっているため、今後、言語による意味表出が困難な人の意味世界を探索する研究方法の開発の必要性も提示し得る。

文献

- 1) 井上寛. (2010). 障害者旅行の段階的発展. 茨城：流通経済大学出版会.

- 2) 井上寛, 根橋正一. (2005). 漂泊と自立ー障害者旅行の社会学ー. 茨城: 流通経済大学出版社.
- 3) NPO 法人全国失語症友の会連合会. (2013). 失語症の人の生活のしずらさに関する調査. 東京: 特定非営利活動法人全国失語症友の会連合会.
- 4) 大田仁史, 遠藤尚志, 失語症者家族. (2009). 旅行は最高のリハビリ!ー失語症海外旅行行団の軌跡ー. 千葉: エスコアール.
- 5) 伊藤智樹編著. (2013). ピア・サポートの社会学ーALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴くー. 京都: 晃洋書房.
- 6) 黒江ゆり子. (2013). 時間的経過を踏まえた看護学における事例研究法の意義に関する論考. 看護研究 46(2), 126-134.
- 7) スージー・パー, サリー・ビング, スー・ギルピン, クリス・アイルランド(遠藤尚志訳). (1998). 失語症を持って生きるーイギリスの脳卒中体験者 50 人の証言ー, 東京: 筒井書房.
- 8) 長谷川幹. (2009). 主体性をひきだすリハビリテーションー教科書をぬりかえた障害の人々ー. 東京: 日本医事新報社.
- 9) 神保洋平. ライフステージにおいて作業適応の危機の経験を持つ高齢者における作業の意味の構造に焦点をあてた探索的研究ー作業の意味構造の検討ー. 2014 年度首都大学東京大学院作業療法科学域修士論文.
- 10) 神保洋平. (2015). 大切な作業の変更可能性の検討ー作業の意味生成様式を用いた事例の一考察. 作業行動研究 19(2), 77.
- 11) M. メルロ＝ポンティ(中島盛夫訳). (1982). 知覚の現象学. 東京: 法政大学出版会.
- 12) 能智正博. (2006). ある失語症者における“場の意味”の変遷ー語られざるストーリーを追いながら. 質的心理学研究 5(5), 48-69.

The Meaning of Traveling and how Traveling Impacted the Subsequent Lives of Patients with Severe Aphasia: Utilization of Traveling in Occupational Therapy

Akiko Tajima¹⁾, Hiroko Yamamoto²⁾, Miki Hasegawa³⁾

1) Seirei Christopher University, School of Rehabilitation Sciences

2) Tokyo Metropolitan Fuchu Rehabilitation Center

3) Sankenjaya Rehabilitation Clinic

E-mail : t-akiko@themis.ocn.ne.jp

Abstract

Objectives: The purpose of the current study was to investigate the meaning of traveling and how traveling affected the subsequent lives of patients with severe aphasia, by conducting interviews with couples that participated in international traveling. We hoped to gain insights about how traveling can be utilized in occupational therapy. **Participants and Method:** We enrolled 4 individuals with aphasia who had not had any events unrelated to traveling (e.g., accidents) in their post-travel lives, whose spouses were also available to attend the interviews. We gathered information about “life before aphasia,” “life after the onset of aphasia,” “life after the travel,” “interest in the travel,” “satisfaction/dissatisfaction of the travel,” and whether the patient would like to go to travel again. **Results and Discussion:** We organized the patients’ report on the meaning of the travel, their attitude about participating, degrees of satisfaction, and changes in their life pre- to post-traveling. The results suggested the possibility that the patients’ voluntary participation in the travel had positive effects on their lives after traveling. The patient’s attitude about participation in the travel was impacted by how actively the patient put a meaning to this travel. Lastly, the degrees of satisfaction of the travel were not associated with revitalization of life after the travel.

Key Words : Aphasia, Community Life, Mean